

国立民族学博物館
日本民芸館

佐々木 享

国立民族学博物館

博物館に行く楽しみは、そこに行くホンモノを観ることができることにある。ホンモノを観る者の心をなごませ、豊にしてくれる。へーと感心したり、やっぱりホンモノはいいな、と感ずることがそれである。

世界諸民族の民具のホンモノを、たっぷり観せてくれるのが国立民族学博物館（以下、民博と略す）である。

民博は、大阪で開かれた万国博覧会の跡地、これが大阪かとおもわれるような、閑静な緑に囲まれた万博公園の中にある（〒565

大阪府吹田市千里万博公園1-1）。民博に行く方法はいろいろある。私がかつて万博に行った時は、新幹線の新大阪で地下鉄に乗り換え、千里中央下車、あとはバスを利用したと記憶する。先日の民博行きには、京都から出掛けたので東海道線の茨木で下車し、バスで行った（問い合わせはTel. 06-876-2151）。ただし、大ていの博物館は月曜（月曜が祝日の場合はその翌日）が休館日なのに、この民博は水曜（水曜が祝日の場合はその翌日）が休館日であるから、要注意。

展示場はとてつもなく広いからそのつもりで入る必要がある。世界の諸民族のいわゆる民具と総称されるものを、地域別に分けて展示している。ここでは、「地域別」の単位が広い。オセアニア-アメリカ-ヨーロッパ-アフリカ-西アジア-東南アジア-中央・東アジア-東アジアという順になり、最後に、朝鮮半島の文化-中国地域の文化-アイヌの文化-日本の文化という順になっている。西アジアと東南アジアとの間に、音楽（楽器）、言語に関する展示がある。むろん、ところどころにジオラマやレプリカ（模造品）

がないわけではないけれども、膨大な展示品の大部分がホンモノであり、充実していることがこの魅力である。世界各地の諸民族の生活や祭典などをビデオで観賞できるビデオテープが豊富である（と聞かされた）けれども、私は時間がおしかったので、展示物の観賞に大部分の時間をあてた。近畿圏に居住している人ならともかく、私などのように遠来の者はそうたびたび来られるところでないから（来てみたいとはおもうけれども）、充分に時間を費やす価値はある。

ミュージアムショップも充実しているし、食堂、喫茶店も、博物館内の施設とおもえない程広く、きれいだ。

一般の見学者には直接には関係のないことだけれども、民博の展示が充実している背景には海外資料12万余、国内資料8万余、計20万点にのぼる（『国立民族学博物館要覧』1994年版による）膨大に収蔵資料がある。その中から選りすぐられたモノが展示されているのだ。その収蔵庫はさらに増築する計画がある由である。ここでは、収蔵物を記録し、管理する技術に関する研究もすすめられている。

国立民族学博物館の設置形態上の特色は、等しく大きな国立博物館ではあるけれども、東京国立博物館（上野の東博）とは違って、国立学校設置法による大学の一種として位置づけられている点にある。実際、ここに働いている多数の職員の中の重要なメンバーは教授、助教授であり、学部はないけれども大学院が置かれている。研究機能が充実している理由はここにある。ついでにいうと、技術教育研究会の千葉大会の終了後に有志が見学した国立歴史民俗博物館（歴博と略す）も同じ大学共同利用機関である。

日本民芸館

昨今は「民芸」「民芸品」も一種の流行の様相を呈している。全国各地の温泉場などの観光地のみやげ品店などでは、「民芸調」と称する商品も多い。流行に乗ったとはおもえないけれども、「民芸」と名乗る現代日本の新劇を代表する有力な劇団もある。こうした事情があるため、ほんとうの「民芸」とは何なのかがわかりにくくなっている。

「民芸」あるいは「民芸品」とは何かについては、この言葉を創った柳宗悦（やなぎ・むねよし、1889-1961）自身がくりかえし語っている。たとえば『日本民芸館案内』に収められた一文では、「『民芸』とは一般民衆の生活に厚く交わる工芸品を指している」とされている。しかし、こう説明されたからといって、民芸とは何かがわかるわけではない。

民芸、民芸品とは何かを知るには、柳自身が収集し、彼自身の主導で創設された日本民芸館に出掛けるしかない。そこにはホンモノの民芸品だけが展示されているからだ。

日本民芸館は東京にある。渋谷から京王線で2つ目、駒場東大前下車、井の頭寄りの改札口をでて約5分の閑静な住宅街の中にある。道路をはさんだ本館の向かい側に長屋門があるなど、建物自体が民芸調だからすぐわかるけれども、玄関の戸が閉まっているので休館かと早とちりする恐れがある。（休館日は、ふつうの博物館と同じく月曜日だ。）

1階に4室、2階に5室程の展示場だから、歩いているうちに疲れてしまう程広くはない。ただし、立ち止まってじっくり眺め、しばしの観賞を楽しむことができるように、民芸調（民芸品）のベンチは豊富においてある。どの部屋に何がある、と説明することは難しいし、あまり意味をなさない。特別展をしばしば行うだけでなく、常設展示場も、3か月ごとに、つまり年4回模様替えするからだ。一度創ったら創設期に並べたままという博物館さえ少なくないのに、良心的なことで

ある。

日本の民衆が古くから（といっても近世よりさかのぼることはない）日常に用いてきた家具、農具、磁器、陶器、かめのような台所用具、わら細工、衣類などが主体で、柳が愛した朝鮮民衆のものがこれにくわわっている。その一つ一つが、じつに美しい。それらはすべて、それぞれの地域のいわば無名の工人、あるいは農民自身の手づくりの作品である。現今の芸術家（気どりの人）が飾ってもらうために制作したのではなく、すべて日用に供されていたものである。そこにおもわず見ほれてしまう美しさを見出したところに、柳らの卓抜さがある。

私がでかけた折は、アイヌの民具の特別展を催していた。昨今なら先住民族の位置が与えられ尊重されるようになったこの民族の民具に、何十年も前に後世に遺すべき美を見出し、収集につとめてきた柳らの眼のたしかさに、おもわずうなってしまった。

日本民芸館の経営主体はいわば純然たる民間の財団法人で、特定のスポンサーがない。入場料が大人1000円と比較的高い感があるのは、この経営基盤の弱さに由来する。その困難な中で、学芸員3名、専任職員5名を擁して、収集展示に努めているとは頭が下がる。念のためいえば、展示の充実度にくらべると決して高くはない。

柳らが日本民芸館創設を企図したのは昭和初年で、大原孫三郎の財政支援を得て、ようやく1936年に設立された。この事実を知って、倉敷にある大原美術館の民芸品の展示が充実していた理由がのみ込めた。観覧者の中には、外国人の姿も混っている。「民芸」はいまや国際的にも注目されていることがわかる。

なお、日本民芸館の直ぐ近くには、広大な旧前田侯爵邸を利用した東京都近代文学博物館が、その隣には日本近代文学の研究者・愛好者にはおなじみの日本近代文学館がある。

（名古屋大学）